

# インド共和国ナガランド州の観光の現状について

—— 祭りとアイデンティティの考察 ——

—— 研究ノート ——

## Contemporary State of Tourism in Nagaland, India

—— a study on festivals and identity ——

小 磯 学

キーワード：ナガランド、ナガ、祭り、精霊崇拝、キリスト教、伝統、アイデンティティ

### 要 旨

インド北東部のナガランド州は2011年の入域制限の解除後、本格的な観光の時代を迎えた。州政府主導の下でかつての精霊崇拝に基づく伝統舞踊を披露する盛大なフェスティバルが開催され、また地域住民による小規模な祭りも今後注目されて行く可能性を孕んでいる。一方で、今日の人々が信仰しているのはキリスト教であり、教会はこれらの「非キリスト教」に由来する祭りに一定の制約を設け、それを教会の管理下におくことに腐心している。

伝統を守ることと信仰を守ることが、観光の場やアイデンティティの確立と密接に関係している事例について考察する。

### はじめに

本稿では、インド共和国北東部に位置しミャンマーと国境を接するナガランド州において、地域振興・観光促進の観点から注目される祭りの現状の一端について概観する。そしてこうした祭りの担い手である民族集団ナガの人々のアイデンティティと自らの文化への自負について、過去150年程の間の変容を振り返りながら考察する。

西部の平野部に連なる「インド本土」に対し、ナガランド州は急峻な山々が連なり交通アクセスが非常に制限された土地である。20世紀半ばまで各集団同士で首狩りを行うなど独自の文化を保持していたことで知られ、またとくに1940-60年代にかけて中央政府からの独立運動が活発化し紛争が多発していたため、外国からだけでなくインド本土からの観光者にも入域許可書を課し旅行が規制されてきた。こうしたことから、外部の者にとってこの土地は今も「辺境の地」というイメージで語られる場合が多い。

1963年にナガランド州の設立という形で一応の「独立」が達成されたのちも一部で抗争が続いたが、ようやく1997年に独立運動の中心を占めるナガ民族社会主義評議会（NSCN）イサク・

ムイヴァー派とインド政府との間に停戦協定が結ばれた（鈴木 2004）。こうして2000年には入域制限が緩和され、さらに2011年には規制が完全に解除されて観光が本格的に途につくことになった。ただし著名なガイドブック『地球の歩き方インド』（地球の歩き方編集室 2015）にはいまだ同州の記載はなく、『Lonely Planet India』（Singh et al. 2015）でさえ4ページ程度の簡単な記述にとどまっているのが現状である<sup>1)</sup>。西遊旅行などが企画するツアーはあるものの、風光明媚な自然と豊かな文化を有するこの土地の一般への知名度はいまだ低いまである。

一方で、今日ではほぼ100%のナガの人々が「伝統的な」精霊崇拝からキリスト教に改宗しているという事実がある。人々のアイデンティティは、改宗とともに大きく変容してきたことが推察される。そしてそれは、外部から訪れる観光者に接することで改めて自覚が促され、強化されることにもなる。このように、ナガでありまた同時にキリスト教徒であることと観光活動とは密接な関係がある。その実情について考える。

## 1. ナガランド概観

### 1-1. 地理・歴史的背景

ナガランド州は、アッサム州やマニプル州などとともに8つの州を含む北東地域（NER: North-Eastern Region）を構成し、面積約1.65万km<sup>2</sup>（四国の9割ほど）に人口約200万人が居住するインド国内では比較的小さな州である（ウェブ：Nagaland Population Census Data 2011）（図1 a、1 b）。その約90%を占めるのが「ナガ」と総称される人々で、上述したように今日ではそのほぼすべてがキリスト教徒である。古来の精霊崇拝を守っているのは数千人に過ぎない。また州人口の残りの10%はヒンドゥー教徒、イスラーム教徒、シク教徒、仏教徒、ジャイナ教徒であるが、これらの人々はインド本土からの移住者であり、ナガから改宗した事例はほぼゼロに等しいと考えられる（表1）。

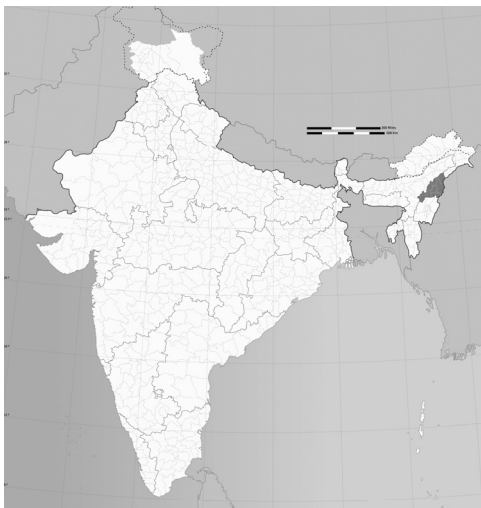


図1 a インドにおけるナガランド州の位置  
(Wikipedia Commons<sup>2)</sup> による)

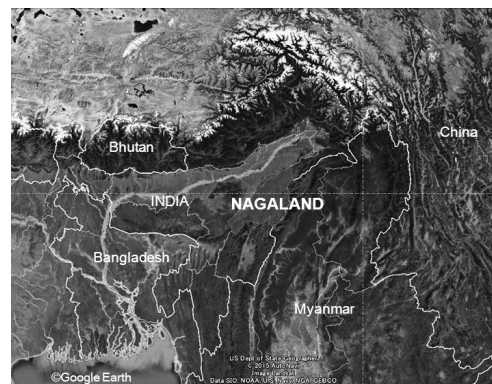


図1 b ナガランド州の位置  
(Google Earth に国・地域名を加筆)

ナガとは、今日ではアンガミ・ナガ、アオ・ナガ、コニャック・ナガなどと呼ばれるさまざまな民族集団の集合名称かつ他称であり<sup>3)</sup>、かつては自らをナガと呼ぶことはなかった。大小含めると全体では60を超えるナガに属する民族集団が数えられ、その分布は現在のナガランド州にとどまらず、周辺の各州のほか、東側のミャンマーにも広がっている<sup>4)</sup>。ナガの語源としてはサンスクリット語のナガ=山、アオ・ナガやコニャック・ナガの言葉ノク、ノカ、ノグ=人間、戦士、ヒンディー語のナンガ=裸など諸説あり明確ではない (Joshi 2008: 38; 鈴木 2004: 43, 70; 栗田 他 1989: 117)。

言語上は大枠でシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属すものの、集団同士の差異が大きく意思の疎通は困難となっている<sup>5)</sup>。政治的にはインドに属しているが、文化的には東南アジアの西端として位置づけることができ、日本人と同じ東ユーラシア人でもある。インドは「多様性のなかの統一」の国として知られるが、その多様性の一端を象徴する人々と文化、土地であるといえる。

州最大の都市ディーマープルが位置する西部のブラフマプトラ平原 (州唯一の空港がある) を除くと、そのほぼ全域には熱帯常緑樹林に覆われた標高1000–3000mの険しい山地が幾重にも連なり (最高峰は3841m)、平地はほとんどない。また20世紀半ば頃まで行われていた首狩りに対する防衛のためほとんどの集落が山の尾根上に築かれていることから、交通上のアクセスは山肌を縫う細い道に限定されるのが実情である。人口約7.9万人 (2001年) の州都コヒマ (図2) も標高1400mの尾根上に位置している。年間降水量は2000–2500mmでとくに夏季に集中して降雨があり、急な斜面に作られた棚田で稲を、焼き畑でヤムイモやサトイモ、アワやトウモロコシなどの各種野菜やバナナ、パイナップルなどの果物を栽培している (Maps of India 2013, 6.12)。

同地の歴史を紐解くと、考古学的には少なくとも数千年前から人々が居住していた痕跡が確認されているほか、9–10世紀や17世紀頃の遺跡も確認されている (Pokharia et al. 2013; Jamir and Vasa 2008; Aier and Jamir 2009; Jamir 2006)。また文献上では2世紀にエジプトのクラウディ

表1 ナガランドにおける宗教人口

宗教人口	人 口	%
キリスト教	1,790,349	90.0
ヒンドゥー教	153,162	7.7
イスラーム教	35,005	1.8
シ ク 教	1,152	0.1
仏 教	1,356	0.1
ジャイナ教	2,093	0.1
そ の 他	6,108	0.3
合 計	1,990,036	100

(Web: Census of India 2011: Population by Religious Communities)



図2 州都コヒマ

オス・プトレマイオスが著した『地理学』や隣接するアッサム地方で13世紀に著された『ブランジ』などに断片的ながら民族集団ナガや今日のナガラランド地方についての記述が散見される。これは外部の人々が記述したものであるが、すでに今日のナガラランド地方に暮らす人々全体を「ナガ」と総称する視点が盛り込まれている。ただしその各々が今日のどのナガに該当するのかは不明である (Oppitz et al. 2008: 12-15)。幾つもの集団が東南アジアや中国方面から来住したと考えられるが、各々の集団やその年代を特定するのは困難である。

今日の人々の明瞭な記録が登場するのは、19世紀に入り紅茶栽培を目的にイギリスがアッサム地方を中心とするインド北東部を支配下に置き始めて以降のことである。1866年にはイギリス領インド帝国の支配下 (ベンガル副総督の管理下) に置かれ、首狩りなどの「野蛮性」を矯正すべく政治的な併合が進められていくことになる。その過程では軍事的な衝突が度々繰り返されたが、それはナガの人々が自分たちの世界の外の人間と初めて対峙し戦った出来事でもあった (Joshi 2008: 40; 鈴木 2004: 43; 栗田 1989: 47)。

また宗教面においては、1840年代以降にアメリカン・バプティストを中心としたキリスト教による宣教活動が活発化し、1872年には最初の教会がアオ・ナガの土地に開設されるなど改宗が進んだ (Joshi 2008: 41)。今日なおアメリカン・バプティストが大多数の75%を占め、その他カトリックを初め少数のリバイバルやペンタコステ派が存在する (図3)。



図3 アオ・バプティスト教会 (コヒマ)

その後100年程かけて、ほぼ100%の人々が改宗していった。とくに1947年のインド独立後には着実に増えたようである (小磯 2015; 小茄子川 2015)。キリスト教以前のさまざまなナガ文化の根幹に関わるような先祖代々伝承してきた多くの習慣が、「未開」ないし「悪魔的」として否定されたという。すなわち、アニミズム的な精霊崇拝やそうした信仰と密接に関連する人生儀礼や農耕儀礼、祭り、勲功祭宴、首狩り、ときに男女ともに裸に近い衣装、装身具、タバコやライスビール (ナガ版のどぶろく)、アヘンの使用、若者小屋での未婚の男女の逢瀬、風葬後に骨を集める2次埋葬などである。19世紀後半から20世紀半ば頃にかけて多くの軍人や人類学者が現地調査を実施しており、こうした改宗前の伝統を記録した貴重な記録となっている (Butler 1875; Furer-Haimendorf 1969; Hutton 1921; Woodthorpe 1982a, 1982b)。

第2次大戦中の1944年には日本軍がインパール作戦を展開し、コヒマとその周辺も激烈な戦場となった。一部のナガの人々は日本軍が援助したインド国民軍に従軍したが、その国民軍からはインド解放後のナガの独立が約束されていたという (多良 1998: 78-90)。こうした経緯ともおそらくは関連をもちつつ、1947年にはナガ民族評議会 (NNC) が (インドがイギリスから独立する前日に) インドからの分離独立を主張する。しかしこれは国際的にも無視され、イ



ンドの一部を構成することになった。

その後も独立運動は続き、インド中央政府による軍事的制圧や村落の焼き打ち・略奪、それらに対抗するナガ側の抵抗運動や武力衝突が続いたが、1963年によりやうくインド政府が一定の譲歩を示して成立したのがナガランド州であった。完全な独立を求めての抗争はその後とも絶えることなく続いたが、1975年に反乱軍の一部が停戦に合意するなど混乱は次第に納まっていった。今日なお独立に向けた一部の活動は継続している。しかし2000年には外国人旅行者に対して、夫婦ないし4人以上の団体に10-20日の入域が許可され（Joshi 2012: 47、註28）、さらに2011年にはそうした規制もすべて解除されて自由に旅行ができるようになった。こうして世界に向けた観光活動が本格化していくことになる。

## 1-2. 観光資源の整備

インドは日本の9倍の面積の国土にタージマハルを初めとする25の世界文化遺産と7つの自然遺産を有しているが（複合遺産はなし）、インバウンド数を見ると2013年度は697万人、世界順位は42位にとどまっている（日本=1036万人、世界27位。ウェブ グローバルノート 2015.4.27; The World Bank 2015）。一方では世界貿易機関（WTO）が今後の15年間の観光産業においてインドを中国と並ぶ最も成長の著しい国にあげており、2007-2017年にかけての成長率が42%と見込まれている（Bhalla 2012: 2; Russell and Cohn 2012: 5; ウェブ Livemint.com 2009.3.25）。

こうしたなか、インド政府は北東地域全域とともにナガランド州の政治的安定や経済成長、教育や交通環境の充実などを前提とした観光産業の発展にも一定の支援策を差し伸べている。インド本土とは異なり大半が東ユーラシア人が居住する北東地域は、歴史的文化的に東南アジアや中国との結びつきが深く、衣食住ともに独自の文化圏を形成している。ヒンドゥー教の影響が少なく、前述したようにナガランド州を筆頭にキリスト教に改宗した人々の割合が高いことも大きな特徴である。さらに、緑豊かで動植物も豊富なこの山岳地帯に、国内を含めたインバウンドの一層の増加が今後期待されている。

ナガランド州政府に観光庁が置かれたのは1981年に遡るが、当初は州外部からの入域制限もあり大きな活動や成果が出せなかった。入域制限が一部緩和された2000年によりやうく旅行代理店や交通設備など観光業に関わる法が整備され、翌2001年には官民レベルで「ナガランド・ツーリズム・ヴィジョン」を立案することでインバウンドへの準備体制が整えられた。下記がそのヴィジョンとしてあげられた主な点である（Bhalla 2012: 92-94; ウェブ Department of Tourism, Government of Nagaland, 2013）。

- ・ナガランドの豊かな歴史、自然・文化資源の活用。
- ・地域住民に社会的・文化的な面でマイナスの影響を生むことなく、全員に経済的利益が行き渡るように配慮する。
- ・自然環境の再生を重視し、自然資源が保持されることに努める。
- ・州内の観光資源を統合し、北東地域の他の州とも連携した効果的なマーケティングを行う。
- ・官・産ともに、長期的なあらゆるレベルの人的資源開発プログラムを確立する。

これらを実現していく事例のひとつとしてあげられるのが、2000年から毎年12月上旬に州政府の主導でコヒマ郊外で開催される「ホーンビル・フェスティバル」である。州内全域の村から16の主要なナガの集団が一堂に集まり、豪華な伝統衣装を身に着け先祖から伝わる舞踊を披露する（図4）。このように伝統文化に接することができるという点では、エスニック・ツーリズムに関わるイベントの創出といえる。2014年にはニューデリーからモーデー首相が直々に訪れ、初日の開会宣言を行っている（The Hindu 2014.12.2）。



図4 イムチェンゲル・ナガの舞。ホーンビル・フェスティバルにて（2011年）

同じくエスニック・ツーリズムのモデルケースとされるのが、コヒマ北方41kmのトゥフェマ村である。アンガミ・ナガの伝統家屋に宿泊し郷土料理やライスビールを味わうなど、ナガの人々のホスピタリティにも触れることができる体験型のツーリスト・ヴィレッジとして整備されている（ウェブ Department of Tourism, Government of Nagaland）。

また豊かな自然を生かしたエコ・ツーリズムの拠点となるのがコヒマ西方20kmに位置するコノマ村で、インド全土初の「グリーン・ヴィレッジ・プロジェクト」のモデル村に選出されている。25km<sup>2</sup>の範囲が動植物の保護区として設定されるとともに、環境アセスメントによって開発と環境保全の評価を行っていく活動にも着手している（Bhalla 2012: 101, 156-167；ウェブ Department of Tourism, Government of Nagaland）。村の南方の標高2400mの山地にはナガラランド有数の美しさといわれるズコー渓谷が広がっており、そこへのトレッキングの拠点ともなっている。コヒマのようなホテルはないものの数軒の民宿が機能しており、主にヨーロッパなどからのトレッカーたちが利用している。

インド政府もまた1986年に北東地域文化センター（NEZCC）をディーマープルに設立し、各地の伝統文化の研究や各種イベントの企画、情報交換の場として機能させている。小さいながらも民具や装身具等を集めた博物館も置かれ、屋外には復元家屋やイベント会場などが並ぶ公園の整備が現在進行中である（ウェブ NEZCC）。

## 2. 祭りの事例

ナガラランド州の観光資源として大きな期待が寄せられているのが、各々のナガに伝えられてきた祭りである。ナガごとに文様が異なる色鮮やかなショールやスカート、紅玉髄や山珊瑚、白い貝、黒や黄色のセラミックなどのビーズを幾重にも重ねた首飾り（遠藤 2015）、太く大きく立体的な真鍮製の腕輪、イノシシの牙や鳥の羽根をあしらった頭飾り。男女ともにこうした正装に身を包み、単調な歌に合わせて円状に並んでゆるやかに踊る。エスニック・ツーリズムないしトライバル・ツーリズムの事例として注目されている。

今日、観光の場における祭りは以下の2種に大きく分類出来る。

①政府主導で企画・運営されている祭り。例：ホーンビル・フェスティバル

②キリスト教改宗以前から継承される先祖伝来の祭り。例：サクレニの祭り

以下では各事例を取り上げ、各々の現状について概観する。

## 2-1. ホーンビル・フェスティバル

前述したようにインド政府の主導で2000年から始まり、毎年12月1-10日（2012年までは7日まで）にコヒマ南方12kmにあるキサマ遺産村を会場として開催されている（図5）。ちなみに12月1日は、1963年のナガランド州成立記念日という象徴的な日でもある。その羽を男性の正装の頭飾りなどに用いるサイチョウ（ホーンビル）から名づけられた。広い会場の敷地内には各々のナガの村に伝わる青年小屋が復元・常設展示されており、ショーや装身具、木彫りなどの工芸品が販売され、食堂で郷土料理も味わうことができる。

舞台となる中央のグラウンドで主だった16のナガ集団が順に各々の色鮮やかな伝統的な衣装や装身具を身につけ、終日10日間にわたって披露する歌舞がメインイベントとなっている（図6）。歌舞の演者グループはそれぞれの故郷の地方から順番に選ばれる村の出身であり、各ナガを代表して来演し、衣装を身につけ、歌い踊ることに誇りを持っていることが感じられた。年によっては他の州に居住する少数派のナガやナガ以外の民族集団、さらにはブータンの歌舞団も参加している。各々の歌舞の前、後ともに、演者全員は舞台となるグラウンドを半円形に囲むように設置された観客席の最前列に座り、他のナガの演目をすべて鑑賞する。

こうした伝統に根ざした歌舞に加えて、ホーンビル・フェスティバルはまた、同会場だけでなく他の場所にある会場で行われる各種多様なイベントによっても盛り上げられ、それらは地元テレビや新聞などでも大々的に報道される。ナガ料理コンテストを初め、ナガ料理でも好まれる豚肉の早食い競争、世界一の辛さといわれる地元産のトウガラシ（ブート・ジョロキア）の早食い競争、キリスト教会聖歌隊の歌唱コンテストや北東地域のアーティストらが出演するロック・フェスティバル、レスリングや競輪、弓矢、モーターラリー、ビューティーコンテスト、フィルム・フェスティバルなどである（ウェブ



図5 ホーンビル・フェスティバル開会式（2013年）



図6 チャクサン・ナガの女性。ホーンビル・フェスティバルにて（2013年）

Department of Tourism, Government of Nagaland)。

冬の間は朝夕の冷え込みが厳しいものの、乾季で雨は降らず青空が広がる日々は観光にとって絶好の季節でもある。コヒマの州政府観光局で頂いたデータによると、キサマ村のメイン会場に限定した来場者数は2014年12月には10日間の延べ人数で172,404人が訪れている。宿泊等の基地となるコヒマの人口が7.9万人なので、その倍以上の人数ということになる。その内訳は①ナガランド州内からのインド人（多数がナガ人）＝（約）154,000人、②ナガランド州外からのインド人＝17,044人、③外国人＝1,360人であった。②＋③では18,404人となり、ナガランド州全体への観光者数が31,118人（2012年時データ、表2。以降のデータなし）なので、そのざっと6割がホーンビル・フェスティバルを訪れているともいえる。このイベントの役割の大きさが窺える。

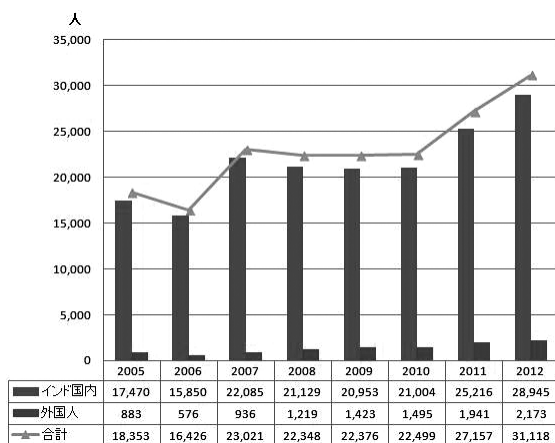
一方で2005－2012年のナガランド州へのインバウンドの推移を見ると2007年に2.3万人に急増したのちは横ばい状態が継続していたが、2011年以降は115－120%の増加に転じている（表2）。やはりこの年に入域許可証が完全廃止されたことがきっかけといえるであろう。ただし外国人の数は微増しているとはいえ全体のほぼ7%程度にとどまっており、広報活動とともに交通アクセスや宿泊設備の整備などが大きな課題といえる。

## 2-2. セクレニの祭り

各々のナガにはそれぞれ先祖伝来の様々な祭りが知られているが、ここではコヒマ周辺に暮らすアンガミ・ナガにとって最も重要なセクレニ（「清浄の祭り」の意。別名：ポウスニの祭り）の祭りに着目する。ナガ暦（太陰太陽暦）ケゼイ月25日（西暦上では毎年ずれが生じ、2月中旬から下旬頃となる）から10日間、ケールと呼ばれる村内の地区単位で行われる。神（精霊）への感謝とともに1年間の穢れを祓い落す浄化儀礼の意味をもち、この間に村を訪れている神に来年までの加護を祈願する。また、かつては男たちが戦いに備えて心身を清める目的もあったという。

残念なのは、キリスト教への改宗に伴って、この数十年の間に他の祭りとともに実施する村やケールが激減してしまったことである。村で聞き取りをしても、「私たちはキリスト教徒なので、そうした祭りを行わなくなった」という答えが戻ってくる。ただし少なくとも一部のアンガミ・ナガの人々にとって今もなおこの祭りは大事なものであるのも事実で、これを存続させることに懸命になっているケールもある。

表2 ナガランド州へのインバウンドの推移  
（州政府観光局から頂いたデータに基づき作成）





2015年2月に実見することができた、コヒマの旧市街バラ・バスティの事例がそれである(図7、8)。全部で4つある地区＝ケール(各々ゆかりの人物名の頭文字をとってP. ケール、T. ケール、D. ケール、L. ケールと呼ばれる)のうち後者2つは祭りの伝統が完全に途絶えて久しいが、今日実施している前者2つが予算上の問題などから10日間ではなく各々2日間と3日間みの短縮版で行っている。それまで細々と各家庭で続けていたものを1987年から改めてケールの住民全体が一丸となって実施することになったという。とくに州政府が介在しているわけでもなくあくまでも地区住民による地区住民のための祭りであり、(外部からの観光者は大いに歓迎とされるとはいえ)少なくとも現状ではその実施を広く告知してない。自らのアイデンティティの拠り所として、昔ながらの形をより忠実に継承しているといえる。

以下、本来の10日間の祭りの流れを簡単に記しておく。

祭りの初日には、日の出前に男性らのみで井戸ないし泉に赴き沐浴したのち正装し(戦いの装いでもある)、新調した各々黒と白の2枚のショールを身に着け、水を胸、膝と右手にかけける。この際に過去のあらゆる不運や苦難が洗い流されるという。この間、女性が同行することはタブーである。壺に水を入れて持ち帰り、家の壁に振りかけて清める。既婚の男性は雄鶏を首を絞めて殺し、その際に地面に倒れた雄鶏の右足が左足の上になっていれば吉祥の兆しとされる。新調した調理具を使い、男性がこの雄鶏の肉を調理する。またその内臓は家の正面の壁に下げしておく。

2日目には森から野生の果物を採取して家を飾る。とくに本家となる家を丁寧に飾る。

3日目には筍を切り、揚げて調理する。

4日目から3日間行われる、テクラ・ヒエと呼ばれる歌と踊りの会が祭りの最高潮となる。男女ともに伝統建築の集会場に集まり、戦士の武勇伝や収穫を感謝する歌などを歌い、ときに踊りを舞うことが終日つづけられる。ミタン(ミトゥン)牛<sup>6)</sup>や通常の牛、豚の肉の特別料理とライスビールが集会場前の広場で人々に振舞われる。前述した、2、3日で済ます短縮版の祭りは、このテクラ・ヒエのみを行うものである。



図7 セクレニの祭り。コヒマ旧市街 T. ケールにて(2015年2月)



図8 セクレニの祭りの会場となる集会場

7日目には若者が狩りに出かける。

8日目は、村の入り口の門を守る木製の大型扉を新調し、男性らによって轎に乗せた扉を門まで曳く儀式を行う日とされる。ただしこれは数年ないし数十年に一度しか行われない。

9日目は料理を村内に配布したり、富裕な家が村民に料理を振る舞う。

祭りの期間のタブーには、畑仕事と性交がある（アンガミ・ナガの人々への取材；Maitra 2011: 74-78；ウェブ：Explore Nagaland 2015）。

一方で、ホーンビル・フェスティバルと同様に、セクレニの祭りの日付けを西暦2月25-27日に固定し、他の各種イベントと合わせてコヒマなどで大々的に実施しようとする州政府観光局の動きも見られる。この祭りの伝統をもつアンガミ・ナガはナガ全体の約6.7%と比較的人口の多い集団であるだけでなく（Shimray 2007: 27）、コヒマを中心に分布しているため観光者にとってアクセスが容易であり、時期的に乾季であることも集客しやすいことが理由であろう。観光資源としてのサクレニの祭りの今後の動向が注目される。

### 3. 伝統文化とアイデンティティの変容

2011年の入域規制の撤廃以降、ナガランド州は観光の新たな時代を迎えている。上記で触れた祭りを通して、ナガの人々が置かれている現状について総括を試みる。

**祭りの「伝統的」側面：**州政府が企画・運営をしているホーンビル・フェスティバルの全体の構成（プログラム）そのものは、キリスト教改宗以前の伝統とは無関係なものである。参加する各ナガの人々、身に着ける衣装と装身具<sup>7)</sup>、歌と踊りは基本的に古来の伝統に則ったものではあるが、本来行う暦上の日取りとは無関係に（つまり本来の場や実施の意味から外れて）、村から遠く離れた土地の観客席に囲まれた舞台で行い、戦士の舞では生首の代わりに木製のレプリカを手にして踊るなど「演出された真正性」（MacCanell 1973）にほかならない。そもそも半世紀前までは互いに敵対して首狩りを行っていた敵同士が一堂に会すること自体、まったく新しい時代の祭り＝フェスティバルを象徴している。

こうしたホーンビル・フェスティバルの目的は、単に観光促進にとどまらない。今日では失われてしまった先祖伝来の文化を若い世代に知ってもらう意味も込められており、実際に10-20代といった若い演者も多く参加している。と同時に、今日でも普段は遠くに住み互いに接することが少ない州各地の他のナガ同士が集い、お互いの伝統的な姿に触れることで、改めて自分が「〇〇」ナガであることを客観視し、その結果ナガ・コミュニティ全体の自覚がより強く促される場ともなっていることがわかる。当然ながらそれは観光者に対しても同様の理解を促すものといえ、州政府による周到な演出が窺える。

サクレニの祭りの場合もまた、他の地域から他のナガが参加するものではないとはいえ、同じく自分らの伝統文化の継承とともにアイデンティティの拠り所として強く意識されている。

**祭りのキリスト教的側面：**ここで注目したいのは、キリスト教の問題である。上述したように2つの祭りは主催者や規模、真正性の度合いが異なるとはいえ、キリスト教改宗以前の祭りを継承する面をもつことは事実である。しかし演者の（ほぼ）全員は、今日ではキリスト教徒

である。ナガの人々の改宗が始まったのは19世紀末にまで遡るが、コヒマ周辺であっても改宗は一部では40-50年前(1-2世代前)までみられた比較的最近の出来事に過ぎない。そしてキリスト教会は改宗当初、前述したように改宗以前の精霊崇拜、首狩り祭りを含むさまざまな習慣を禁止した。その結果、多くの伝統が廃れていき、世界の多数の地域と同様に西欧化が進んだ。

今日なお、とくに多数派を占めるバプティスト派の教会が、ホーンビル・フェスティバルやサクレニの「非キリスト教的」な祭りをかならずしも快く思っていない点が指摘されている(Longkumer 2015: 56)。祭りの演者(信者)は今日では首狩りなどは否定しても、その他のキリスト教以前の文化的側面の多くにナガとしてのアイデンティティを見出している。一方で州内には奥地の村にもかならずりっぱなキリスト教

会が建てられ、日曜礼拝には老若男女が教会に集い、調査でお世話になった大学教員や宿泊したホテルの若いオーナーなども熱心に讃美歌を歌う姿に接するとき、彼らが純粋にキリスト教徒としての自覚を持っていることが強く感じられるのも事実である。ナガであり同時にキリスト教徒でもあることが、どのような意味をもつのかを推し量ることは難しい(図9)。

ただし少なくとも祭りの場において、教会と信者(祭りの演者)との間に微妙な意識の乖離があるのは事実である。たとえばホーンビル・フェスティバルは主催者が州政府ということもあり初日に開会を宣言するのは州政府の要人(2014年にはニューデリーから訪れたモーディー首相が務めた)であるものの、(少なくとも今日では)聖歌隊も舞台上で歌いキリスト教色も強く打ち出す内容になっている。しかし教会としてはそれでは不十分なようで、2012年にはホーンビル・フェスティバルの会場を見降ろす山の頂上に小さいながらも十字架が組織委員会の一部によって建てられ、本フェスティバルと会場がキリスト教の下にあることが「宣言」された。規模は異なるが、多少なりともリオ・デ・ジャネイロのコルコバードのキリスト像を意識したものであるという意見も聞かれる(Longkumer 2015: 57)。

草の根的に継承されているサクレニの祭りでも事情は同様であり、地元のバプティスト教会はこの祭りの実施をむしろ反対していることを、数名の参加者から聞くことができた。それでも実施を完全に否定することなく、教会側の折衷案として現在取りきめられているのが以下の2点であるという。

①サクレニ本来の10日間の祭りの初日にあたる、井戸や泉の水での心身の清めを行わない。これは男性らが行うことで初めて祭りを開始できる重要な行為のはずである。しかし参加していたナガの男性(キリスト教徒)によると、これを省くことを条件に教会側からは祭りの実施が許可されているという。その結果、予算上の制約もあり、コヒマの旧市街バラ・バスティの2つの地区では、本来の祭りの4-6日目を彩る歌舞のみに限定して開催している。

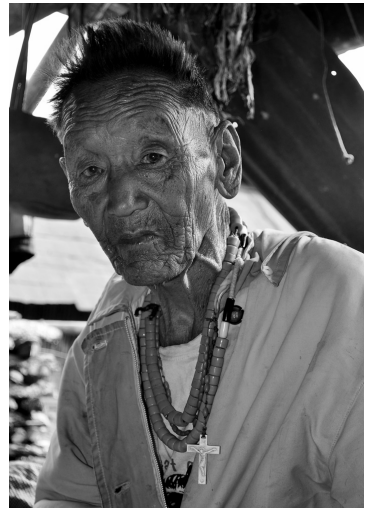


図9 十字架をつけたアンガミ・ナガの男性

水による清めはキリスト教の洗礼とも共通する行為にほかならず、これを省くことで（キリスト教以前の伝統的な）宗教色を失わせる意図が窺える。

②開会式の宣言を牧師が行う。実際には淡々と語りかける静かな挨拶に過ぎないが、上記①で宗教色を消失させた上で理論上この祭りがキリスト教の管理下にあること（あるいは「キリスト教の祭り」と化したこと？）を宣言していることになる。

こうしたことは、ナガの人々がキリスト教以前の先祖伝来の文化を現代社会に即した形で継承し、同時にまたキリスト教徒であるために必要な手続きなのであろう。新しい時代に即した新しい伝統の創出ということができる。

「ナガ」の再生産：すでに見たように今日のナガの人々にとって自らが「ナガ」であることは、キリスト教改宗以前の文化（その少なくとも一部）を継承しつつ同時にキリスト教徒であることを意味する。この2つの文化を心のなかでどのように葛藤なくバランスを保っているのだろうか。ただ改宗の結果、前述したように多くの祭りが取りやめになるなど、さまざまな古来の伝統が失われてきたのも事実である。

一方で、ホーンビル・フェスティバルの開催や入域制限の解除に伴い訪れたナガランドの外からの観光者や研究者の「まなざし」（アーリ 1995）によって、ナガの人々がより客観的に自らの文化を見直す機会が増えている。普段は洋装になったとはいえ、多くの家には古来の正装の衣装や装身具が大事に保管されているし、今日の若い世代が自らのルーツについて当然ながら祖父母らから話を聞く。さらにそうした外部の者からのまなざしや世代間の伝聞にとどまらず、文化の見直しの際に「参考資料」として少なからぬ役割を果たしているのが、専門家がまとめた記録や写真集であるという（Logkumer 2015: 52）

先にも触れたように19世紀末から20世紀前半にかけてイギリスの文官や軍人らがナガランドで精力的に調査を行い、とくに人類学者でもあったインド高等文官（ICS: Indian Civil Service）の J. H. ハットンや J. P. ミルズなどの記録が著名である（Hutton 1921a = 再販2003, 1921b = 再販2007; Mills 1922 = 再販1980, 1926 = 再販2003など）。実際に現地の村を訪れている際にも「ハットンを知っているか」という質問を度々受けたことから、少なくともこうした記録を通してナガが世界に紹介されていることはよく知られているようである。

さらに昨今では、こうした初期の研究者らがヨーロッパに持ち帰りその後各地の博物館のコレクションとなっているナガの伝統の品々の集成や、今日のナガについての論考兼写真集がヨーロッパやインドの人類学者らによって相次いで発行されている（Ao 2003; Jacobs et al. 2012; Karmakar and Doulo 2008; Kunz and Joshi 2008; Oppitz, et al. 2008; Stirn and van Ham 2003; Saul 2005; van Ham and Saul 2008）。こうした写真や評価の情報がナガの人々にフィードバックされ、自らの文化の理解を深めている。新たな形の文化が創造されたわけではないものの、外部の人々のまなざしが自らを改めて見つめ直すきっかけとなり、文化を次の世代へと紡ぎだして行く事例のひとつといえる。

100年程前の、あるいは今なお著されているこうした著作・記録には、ヨーロッパの人々が非ヨーロッパ圏の「未開で野蛮な」人々に抱いてきたオリエンタリズムやエクゾチズム、ノスタ



ルジーといった言葉で表現されるヨーロッパが忘れ去ったものへの憧れが深く投影されている。それはキリスト教が宣教活動のなかで根絶しようとしてきたものでもあるが、今日では古来のナガとキリスト教とが共存する新たな時代に向けて昇華した「ナガ」としてのアイデンティティの拠り所にさえなっているように思われる。

## まとめ

イギリスの支配下以前、ないしキリスト教の普及以前には存在していなかったナガという概念・名称が、かつては敵対していた集団の枠をも超えた総称として今日積極的に用いられている。しかし現実にはそのナガについての受け止め方も一枚岩ではなく、多様な立場・考えが混在・対立している。それは政治的にはインド政府に対するナガの立場についての見解の相違であり、宗教的にはキリスト教多数派のバプティスト派とその他のリバイバルやカトリックなどの見解の相違、さらにはキリスト教と今も一部で信仰される精霊崇拜との見解の相違などである。こうした多様な見解が複雑に絡み合い、さまざまなナガが共存しているのが実情である。

今日、州政府の主導によるホーンビル・フェスティバルはそうした多様性を踏まえた上で開催されているが、一体感の演出・創出に関しては一定の成功を収めているように思われる。また小規模でより伝統に即したサクレニの祭りも、地区住民の自主的な努力によって維持されている。これらの祭りの規模や実施の仕方、構成に違いはあるものの、いずれも古い先祖伝来の伝統に基づいており、他の土地から訪れた観光者にとって非常に魅力的でエキゾチックなものであるのは間違いない。サクレニの祭りは認知度は低いものの、広報活動を充実させれば多くの観光者を集めることができ、祭りの存続を堅固なものにしていくことができるであろう。

しかしいずれの場合も演者はキリスト教徒が主体であり、祭りの重要部分の実施を教会が禁じるなど理論上の「キリスト教化」が図られている。しかしそのことは、歌舞を見ているだけでは観光者にはわからない。エスニック・ツーリズムの歪みの事例のひとつともいえるかもしれない。キリスト教徒であり同時にナガである演者が、教会と今後さらにどのように折り合いをつけて行くのかが注目される。それはナガの人々が自分たちをどのように理解して行こうとしているか、つまり自らのアイデンティティをどのように考えていくのかを、改めて問うことを意味する。今後ナガとナガランド州の観光促進を活性化し持続して行く上で、要となる重要な課題であると考ええる。

## 付記

2015年3月にナガランド州の南に接するマニプル州インパールにあるタンクール・ナガのバプティスト教会を訪問する機会を得た。その日曜礼拝では聖歌隊の女性メンバー全員が上半身は洋装、下半身はナガ風の巻きスカートを纏っていたが、首にナガ由来の首飾りを着けている姿に衝撃を受けた（男性は白ワイシャツにネクタイ、ズボン）。その一方で、教会を訪れる数百人の一般の女性信者は同様にナガ風スカートを纏っていても、誰ひとり首飾りをしていないことが非常に印象的であった。

本稿は、2013－2014年度科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究「南アジアの紅玉髓製工芸品の流通と価値観－「伝統」を支える社会システムの考察」(研究代表者：小磯学 課題番号：25570013)、及び2014年度神戸夙川学院大学個人研究奨励金の成果の一部です。心より感謝申し上げます。

## 註

1. ただしウェブ版の Lonely Planet では、見所や写真ギャラリー、一部ツアーの紹介などナガランド各地のデータが蓄積されつつある (<http://www.lonelyplanet.com/search?q=nagaland>)。
2. [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:India\\_Nagaland\\_locator\\_map.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:India_Nagaland_locator_map.svg)
3. 以下の主だった16の民族集団ナガをあげることが一般的となっている。アングミ、アオ、チャケサン、チャン、キアムンガン、コニャック、ゼミ、リヤンメイ、ロンメイ、ロタ、ポム、ポチュリ、レングマ、サンタム、スミ、イムチェンゲル (Joshi 2008: 37-38; 栗田他 1989: 123-126)。またこれらを含むすべてのナガは、インド政府の下では「指定部族 Schedule Tribes」と定義づけられている (Census of India 2001)。
4. 1980年に設立されたナガ民族社会主義評議会 (NSCN) は、この全ナガ民族が居住する土地を「ナガリム (グレーター・ナガランド)」と呼び、独立対象地域として位置づけている (ウェブ Longkumer 2015: 62)。
5. 隣接するアッサム語などをベースにしつつ、ナガ同士の共通語としてナガ語 (ナガミーズ。クレオール言語) が20世紀半ば頃までに生み出されてきた。しかしかならずしもナガランド全域に普及しているわけではなく、また50歳代以上の世代では話せない人も多い。
6. ミタン牛はネパールから東南アジアにかけて、及びインド亜大陸の一部に分布するインドヤギウの一種で、ナガランド地方では富の象徴として重要視される家畜となっている。村周辺に広がる共有地の山々の深い森に放たれているが、すべてに所有者がいる。
7. 本来であれば男女ともに装身具の中心を占めるのは紅玉髓や貝、セラミックなどのビーズを連ねた多くは先祖伝来の豪華な首飾りであるが、独立紛争の際に損失、経済的理由からの売却などのため、安価なプラスチックやガラス製ビーズのレプリカの首飾りも多い。

## 引用・参考文献

- Ao, A.S. 2003 *Naga Tribal Adornment: signatures of status and self*. Bead Society of Greater Washington, Washington.
- Aier, A. and T.Jamir 2009 Re-interpreting the Myth of Longterok. *Indian Folklife* 33: 5-9.
- Bhalla, D. 2012 *Sustainable Tourism Development of Nagaland (Strategies for Socio-Economic Development)*. Jnanada Prakashan, New Delhi.
- Butler, J. 1875 Rough Notes on the Angami Nagas and their languages. *Journal of the Asiatic Society* 44(1): 307-346.
- Furer-Haimendorf, C.von 1969 *Konyak Nagas: An India Frontier Tribe*. Holt McDougal.
- Hutton, J.H. 2003 (First published: 1921a) *The Angami Nagas*. Directorate of Art and Culture, Government of Nagaland.
- Hutton, J.H. 2007 (First published: 1921b) *The Sema Nagas*. Directorate of Art and Culture, Government of Nagaland.
- Jacobs, J., A.Macfarlane, S.Harrison and A.Herle 2012 (revised edition of 1990) *The Nagas: Hill Peoples of Northeast India*. Thames and Hudson, New York.
- Jamir, T. 2006 A Burial Site at Jotsoma and the Mortuary Customs of the Angami Nagas. In Sengupta, G., S.

- Roychoudhury and S.Som (eds.), *Past and Present - Ethnoarchaeology in India*. Pragati Publications, New Delhi: 449-463.
- Jamir, T. and D.Vasa 2008 Archaeology of Local Cultures: New Findings and Interpretations in Nagaland. In Oppitz, M., T.Kaiser, A.von Stockhausen and M.Wettstein (eds.), *Naga Identities: Changing Local Cultures in the Northeast of India*. Snoeck Publishers, Gent: 323-341.
- Joshi, V. 2008 “The Naga: An Introduction” In Kunz, R. and V.Joshi (eds.), *Naga A Forgotten Mountain Region Rediscovered*. Museum der Kulturen Basel, Christoph Merian Verlag: 37-49.
- Joshi, V. 2012 *A Matter of Belief: Christian Conversion and Healing in North-East India*. Berghahn Books, Oxford.
- Karmakar, R. and M.Doulo 2008 *Where the Warriors Waltz. Festival of Nagaland*. Department of Art and Culture, Government of Nagaland.
- Kunz, R. and V.Joshi 2008 *Naga: A Forgotten Mountain Region Rediscovered*. Christoph Merian Verlag and Museum der Kulturen, Basel.
- Maitra, K. 2011 *Nagaland: The Land of Sunshine*. Anjali Publishers, Kolkata.
- MacCanell, D. 1973 “Staged Authenticity: Arrangement of Social Space in Tourist Settings.” *American Journal of Sociology* 79(3): 589-603.
- Mills, J.P. 1980 (First published: 1922) *The Lotha Nagas*. Directorate of Art and Culture, Government of Nagaland.
- Mills, J.P. 2003 (First published: 1926) *The Ao Nagas*. Directorate of Art and Culture, Government of Nagaland.
- Oppitz, M., T.Kaiser, A.von Stockhausen and M.Wettstein (eds.), 2008 “The Nagas: An Introduction.” In Oppitz, M., T.Kaiser, A.von Stockhausen and M.Wettstein (eds.), *Naga Identities: Changing Local Cultures in the Northeast of India*. Snoeck Publishers, Gent: 11-28.
- Pokharia, A.A., T.Jamir, D.Tetso & Z.Venuh 2013 Late First millennium BC to Second millennium AD Agriculture in Nagaland: A Reconstruction based on Archaeobotanical Evidence and Radiocarbon Dates. *Current Science* 104(10): 1341-1353.
- Russell, J. and R.Cohn 2012 *Tourism in India*. Lennex Corp, Edinburgh.
- Saul, J. 2005 *The Naga of Burma: Their Festivals, Customs and Way of Life*. Orchid Press, Bangkok.
- Shimray, U.A. 2007 *Naga Population and Integration Movement*. Mittal Publication, New Delhi.
- Singh, S., A.Blasi, M.Benavet, P.Clammer and M.Elliot 2015 *Lonely Planet India*. Lonely Planet Publications, Melbourne.
- Stirn, A. and Peter van Ham 2003 *The Hidden World of Naga. Living Traditions in Northeast India and Burma*. Prestel Verlag, Munich.
- van Ham, P. and J.Saul 2008 *Expedition Naga: Diaries from the Hills in Northeast India 1921-1937-2002-2006*. Antique Collectors’ Club Ltd., Woodbridge.
- Woodthorpe, R.G. 1882a Notes on the Wild Tribes Inhabiting the so-called Naga Hills. Pt.I. *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 11: 56-73. *Asian Perspectives* 40(1):48-73.
- Woodthorpe, R.G. 1882b Notes on the Wild Tribes Inhabiting the so-called Naga Hills. Pt.II. *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 11: 56-73. *Asian Perspectives* 40(1):196-214.
- アーリ、J. 1995『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局。
- 遠藤 仁 2015「ナガランドにおける赤色装身具の記録保存」、小磯学（監修）・遠藤仁（編集）『南アジアの紅玉髓製工芸品の流通と価値観—「伝統」を支える社会システムの考察』（2013-2014年度科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究成果報告書、21-33頁。
- 栗田靖之 1989「イギリスのインド支配」栗田靖之（編）1989『北東インド諸民族の基礎資料』国立民族学博物館研究報告別冊9号、42-52頁。
- 栗田靖之・月原敏博・人見五郎・八木祐子 1989「北東インドの部族」、栗田靖之（編）『北東インド諸民族の基礎資料』国立民族学博物館研究報告別冊9号、65-316頁。

- 小磯 学 2015「ナガランドにおける紅玉髓製ビーズの文化的・歴史的背景と現状」、小磯学（監修）・遠藤仁（編集）『南アジアの紅玉髓製工芸品の流通と価値観―「伝統」を支える社会システムの考察』（2013－2014年度科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究成果報告書、3－20頁。
- 小茄子川歩 2015「キリスト教の普及と伝統的ナガの解体―紅玉髓ビーズを用いたネックレスの消失プロセスとその意義」、小磯学（監修）・遠藤仁（編集）『南アジアの紅玉髓製工芸品の流通と価値観―「伝統」を支える社会システムの考察』（2013－2014年度科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究成果報告書、34－45頁。
- 鈴木正崇 2004「首狩りからツーリズムへ―ナガランドの現在」『インド考古研究』25：41－70頁。
- 須藤 廣 2007「現代の観光における「まなざし」の非対称性―タイの山岳民族「首長族（カヤン族）」の観光化を巡って」『都市政策研究所紀要』1：31－41頁。
- 多田俊照 1998『入門ナガランド―インド北東部と先住民を知るために』評論社。
- 地球の歩き方編集室 2015『地球の歩き方インド』ダイヤモンド・ビッグ社。

#### ウェブサイト（以下、最終閲覧日2015.10.17）

- Census of India 2001 Nagaland Data Highlights Scheduled Tribes.  
[http://censusindia.gov.in/Tables\\_Published/SCST/dh\\_st\\_nagaland.pdf](http://censusindia.gov.in/Tables_Published/SCST/dh_st_nagaland.pdf)
- Department of Tourism, Government of Nagaland, 2013 Tourism Policy 2001.  
<https://nagalandjournal.wordpress.com/2013/03/24/tourism-policy-2001-government-of-nagaland/>
- Department of Tourism, Government of Nagaland. 2014 Tourism Nagaland.  
<http://tourismnagaland.com/#>
- Explore Nagaland 2015 Sekrenyi - Angami festival of purification  
<http://www.explorenagaland.com/festivals-of-nagaland/sekrenyi-angami-festival-of-purification/>
- Longkumer, A. 2015 “As our ancestors once lived”: Representation, Performance & Constructing a National Culture amongst the Nagas of India. Himalaya, the Journal of the Association for Nepal and Himalayan Studies 35(1): 51-64. <http://digitalcommons.maclester.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1998&context=himalaya>
- Livemint.com 2009.3.25 Tourism set to boom in India: Deloitte  
<http://www.livemint.com/Companies/BZdIvP7KaJyAJs8dcwxSEI/Tourism-set-to-boom-in-India-Deloitte.html>
- Maps of India 2013.6.12 Geography of Nagaland.  
<http://www.mapsofindia.com/nagaland/geography.html>
- National Turk 2014.10.7 “The foreign tourist arrivals in India increased by over 4 per cent in 2013”  
<http://www.nationalturk.com/en/foreign-tourist-arrivals-in-india-increased-by-over-4-in-2013-45927>
- NEZCC (North East Zone Cultural Center)  
[http://nezzcindia.in/About\\_NEZCC.aspx](http://nezzcindia.in/About_NEZCC.aspx)
- Stark Tourism Associates  
[http://www.starktourism.com/tourism\\_india.html](http://www.starktourism.com/tourism_india.html)
- The Hindu 2014.12.2 Modi inaugurates Hornbill Festival.  
<http://www.thehindu.com/news/national/other-states/modi-inaugurates-hornbill-festival-announces-development-measure-to-ne-states/article6651475.ece>
- The World Bank 2015 “International tourism, number of arrivals.”  
<http://data.worldbank.org/indicator/ST.INT.ARVL>
- グローバルノート 2015.4.27 海外からの旅行客数（受入数）国別ランキング統計・推移  
<http://www.globalnote.jp/post-3608.html>
- 日本旅行業協会 2015 「各国の外国人旅行者受入数（2013年）上位40カ国」  
<https://www.jata-net.or.jp/data/stats/2015/11.html>